が共存する小さな孤島で住民が追い詰められたという現実が、あの惨事を招いたのである。

八月十五日の平和宣言の日から戦争体験の実存的内面化、思想化が長い期間を経て私の中で起こるのである。それは戦争の恐ろしい悪夢にさいなまれながら、戦争の罪意識へと深化していった。キリストは十字架の苦難を通して平和と救いを与えられた。日本は敗戦の苦難といく百万の同胞の尊い命の犠牲によって、憲法にうたわれた平和と人権尊重と主権在民を手にした。

金城さんの話をきくうちに、右の手記を補足する見解や事実をいくつか知った。以下にメモ風に記録しておきたい。

「日本と沖縄が合体して百年しかたっていない。天皇とは沖縄の人びとにとって、中央政府によって他律的に押しつけられた国家支配統合のシンボルであり、力であって、なじみにくいものであった。従って皇民化教育は沖縄統治に関する限り極めて重要な政策として推進された」

「沖縄伝統の言語、芸能その他の文化的遺産が蔑視すべき価値の低いものであるとの認識、最も典型的なのが琉球方言の軽視である。他の都道府県では見られない徹底した言語教育、即ち標準語励行の裏面で、方言を使えば方言札という罰札を首に掛けられるし、方言を使用することに罪の意識を起こさせる程だった」

「永年ヤマトゥから差別を強いられ、劣等意識を植えつけられた沖縄人も皇国民としての教育を受け、滅私奉公、天皇に仕えることによって立派な臣民となり、天皇の赤子となれるのだという一種の誇り、名誉心をして、沖縄人の精神構造をかえさせた。皇民化教育は軍国主義教育と不可分であった。沖縄戦はこのような精神状況をつくる絶好のチャンスであった」

「私は渡嘉敷島のあの体験を二十数年間心のうち深くに秘めて語り伝えることをしなかった。脳裡にあの戦慄すべき惨事を再現することに堪え得なかった」

「渡嘉敷集団自決は通常の戦争の論理構造を超える。一般に殺しの論理とは敵に対して、あるいは国家権力へのアンティの立場である。渡嘉敷の集団自決は肉親同士の殺し合いであり、血縁、地縁の島の運命共同体へのアンティである。皮肉なことに、守られるべき民は先に死に、守るべき軍隊は最後まで生き延びた。軍隊と島との運命共同体意識は集団自決を頂点として形成されたが、悲劇の終わりは、このフィクションが幻想にすぎなかったことを実証した」

「暗闇の一夜は明けた。最初のうちは三月二十八日が具体的にどのような日になるかだれにも予想がつかなかった。千人ぐらいの住民が一ヵ所に集結させられ，その時からいよいよ死への道へ向かっていることを直感した。軍からの自決命令を待つ態勢に入って行った。何時間待ったかわからない。宣告を受けた死刑囚が、死刑執行の時刻を待つような心境だったのだろう」

「家族や親類同士が一ヵ所に寄り集まる。死の会話が大人たちによって交わされる。目には悲痛の涙、心には悲壮の決意、母親たちは、わが子らに泣きながら自分たちの最後の運命を語る。死以外に道はないと私たちは信じ込んでいた。あの死の場面で極めて印象的だったのは、女性たちだった。死を前にして、髪をきれいに整えていたのである」

「かつて地区の区長だった人が、生えている一本の小さな木をへし折って、最愛の妻子をなぐり殺しはじめた。集団自決場は異常なふんいきに包まれた。私の遠い親類の男性は

家族全員を殺した。首つりをしようとして木の枝にひもを結んだが自分は死ねない。夢遊病者のようにうろついていた。兄と私は母と弟妹の最期を見届けるまでは死ねないのである。自らの手で愛する者の命を絶つ事はせめてもの慰めであり、兄と二人で最初に手をかけたのは母であったと思う。その時私は生まれてはじめて悲しみゆえに号泣した」

「集団自決から生き延びた直後の私の心の中には、助かったという安堵感はなかった。戦争はどうせ長期化するにちがいない。再び死ぬ機会があろう。次の死の機会に期待をかけて、今しばしの余命をつなぐというのがいつわらざる心境であった」

「私は日本皇民化教育の最大の犠牲者の一人に仕立てあげられた。そして、舞台の上では加害者の役割を演じなければならない未成年者だった。皇民化教育は、人間を内側から破壊するデモ－ニッシュ（悪魔的）な力だった」

【『沖縄・八十四日の戦い』（榊原昭二著（株）岩波書店）所収】

教え子たちよ！　［遺　稿］

與那覇　政　男（恩師・故人）

昭和十九年十月十日、初めて敵機の大編隊による空襲があり、那覇市は午後になって暁夷弾の集中攻撃を受けた。

県立第二高女の校舎は、最初直撃弾を免れて無事だったが、隣接の松山国民学校に火の手が上がり、それは天を焦がして燃え盛った。そのため校舎は類焼を受け、せっかく昭和十五年に完成した新校舎も、生徒を育てること僅か五年にして、ついに午後六時頃には全焼して灰と化してしまった。幸いにも隣接の知事官舎は焼け残ったので、そこで授業をしながら、焼け跡の片付け作業を行ったが、やがて軍の陣地構築に動員された。

空襲で校舎を失ったので生徒らは父兄と共に県外疎開をし、或いは家族の許に帰ったので、残った生徒は一学級二十名内外となった。そのうちに、職員も軍籍にある者は現地召集を受けて入隊するようになり、最後には四～五名の職員によって、軍の陣地構築作業の合間を見て、授業に当たるありさまとなった。しかし、校長、教頭以下残った四～五名の職員と、約二百名の生徒は、そのような状態になっても挫けることなく、張り切って事に当たった。

昭和二十年に入ってからは、いよいよ情勢は切迫したので、ついに那覇での授業は断念の止むなきに至り、下級生は首里に移動することになった。

昭和二十年二月、最上級生の四年生六十五名（その頃にはそれだけしか残っていなかった）のうち、身体やその他に支障のない五十五名が、軍の要請によって看護教育を受けることになり、当時東風平国民学校（島尻郡東風平村）にあった第二十四師団野戦病院へ入隊、金城宏吉教諭と私が、引率者としてこの生徒たちと行動を共にすることになった。

昭和二十年三月二十三日、ついに敵機動部隊は沖縄に接近。約一か月の訓練を受けた四十六名の生徒たちは、従軍看護婦として正式に入隊。軍属の身分を許可されて、野戦病院に配属された。翌二十四日、金城宏吉教諭と私は、引率者の任務を解除されて帰校を命ぜられた。

当時、学校の本部は、首里と西原村の棚原に置かれていた。私は、看護教育を受けた四十六名の生徒が、正式に軍属として野戦病院に入隊したことと、金城教諭と私が引率の任務を解かれたことを、校長に報告するため首里へ急いだ。首里の校長宅で報告を済ませた私は、間もなく南部の港川方面が、敵から艦砲射撃を受けていることを知った。首里の壕に身を寄せながらも、野戦病院に引き取らせた生徒たちのことが、気になって仕方がなかった。

三月二十七、八日頃には、既に敵は慶良間列島に上陸し、敵機は首里上空を乱舞するありさまで、本島への上陸は今明日中かと判断された。

昭和二十年四月一日、ついにそれは現実となって訪れたのである。中部の読谷方面は、夜明けと共に、海空からの凄まじい集中攻撃を浴びていたが、やがて無数の上陸用舟艇をもって、敵は嘉手納海岸に上陸したとのことであった。それからというものは、我が主陣地正面である首里北方周辺において、昼夜を分かたぬ激しい攻防戦が続けられたが、四月下旬に至ると、軍司令部のある首里にも敵弾が落下するようになり、ついに学校の本部とも連絡不可能な状態になってしまった。

軍に預けて来た看護隊の生徒のことを案じながら、それからというもの私は戦野を彷徨したのである。幾度か生徒の所へ行こうとしたが、マラリアと栄養失調で動けなくなった私は、到底それも出来なかった。五月下旬には、軍司令部も摩文仁に移動したが、既に敵上陸以来二か月を戦った軍の主力は、その大半を失ってしまい、南部移動後は随所に陣地は破壊され、ついに六月二十三日、牛島司令官と長参謀長は自刃したのである。

不思議に命を永らえてしまった私は、忘れもしない昭和二十一年の一月、不甲斐ない身を首里に運んだ。帰ってみると、学校長以下十一名の職員と看護隊の生徒はもうこの世になく、靖国の花と散っていたのである。この悲報に接したとき、私は気も狂わんばかりであった。ただ申し訳なさで一杯だった。

金城宏吉教諭、西平一男教諭、それに生き残った生徒たちと共に、『白梅之塔』を建立して供養することが、今はただ私に与えられた務めである。

昭和二十一年　五月　　（元県立二高女教諭・白梅隊引率者）

【『平和への道しるべ…白梅学徒看護隊の記録…』（白梅同窓会編）所収】

沖縄戦の学徒たち

金　城　和　彦

昭和十八年に入ると、戦局はいよいよ急を告げた。遂に大学・高等専門学校（旧制）にあった学生も、教育、医科、理工系以外は入営延期の特典がなくなり、入隊することになった。これが世に言ふ学徒出陣である。

そしてその年の秋、明治神宮外苑競技場において、出陣学徒の壮行式が盛大に行はれたが、いまでも雨の中を歩武堂々と分列行進をしたあの姿は、忘れることができない。

かくて、ある者は海軍の学校に入り、ある者は陸軍の学校に入り、短期間の教育訓練を受けた後、速成の士官となって戦場へ馳せ参じていった。

しかし出陣学徒はそれだけではなかった。もっともっと蕾のやうな幼い者があった。それは沖縄戦の中学生、女学生である。

この生徒たちは、昭和二十年三月下旬、敵の一大機動部隊が沖縄に現はれるや、中学生は、直ちに鉄血勤皇隊、通信隊を編成、陸軍二等兵になって第三十二軍麾下の各部隊に配属され、戦列に加はったのである。

そしてこの少年兵たちは、主戦場において、ある者は急造爆雷を背負って敵戦車に突入、ある者は斬込隊員となって敵陣に散り、ある者は弾雨の中に通信、伝令の任務を遂行しながら、真に鬼神も哭く勇戦をなし、その大半が国に殉じて逝った。

思へば軍の制度において、少年たちを採用した幼年学校を初め、航空、戦車、兵器、通信学校などあったが、それらはいまだ軍人ではなく生徒であった。しかしこの沖縄戦の中学生は、とくに通信、伝令に身を挺した下級生などは、いまだ童顔溢れる十二、三歳の少年ながら、陸軍二等兵といふ歴とした軍人となった。おそらく明治建軍以来の、わが陸海軍における最年少の軍人であったと思はれる。

この中学生たちの尊き学校名は、沖縄師範学校男子部、沖縄県立第一中学校、同県立第二中学校、同県立第三中学校、同県立工業学校、同県立農林学校、同県立水産学校、市立商業学校、私立開南中学校である。

また女学校の生徒も、昭和二十年三月下旬、陸軍軍属に任ぜられて従軍看護婦となり、野戦病院に配属されて健気にも戦列に加はった。

そしてこの少女たちは、矢弾降る戦場の真只中において、天使のやうな笑みを忘れず、精神力のあらん限りをつくして傷病兵の看護に当り、哀れそのほとんどが天翔ける身となった。

ところで従軍看護婦と言へば、「火筒のひびき遠ざかる、あとには虫の声もなく、‥‥。」と歌はれたのでも分る通り、普通には、安全な場所とされる戦場の後方にあって任務につくのが、これまでの戦史における通例だったが、しかし沖縄戦のこの少女たちは、弾雨の最前線において任務に身を挺したのである。おそらくこのやうな事実は、世界のいずれの、国にもなかったことであろう。

その尊き学校名は、沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校（ひめゆり部隊）、同県立第二高等女学校（白梅部隊）、同県立第三高等女学校、同県立首里高等女学校（ずゐせん部隊）、積徳高等女学校（積徳部隊）、昭和高等女学校（梯梧部隊）である。

さらに沖縄戦では、いたいけな小学生までが軍に協力して戦野に斃れ、あるひは疎開学童八百が洋上（鹿児島県十島村悪石島の西北約十三キロの洋上）で敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、疎開船「対馬丸」と共に海底深くその短かき生命を失ったのである。

思へば、僅か十有余年の生涯であった中学生、女学生たちが、国難に際会するや身を挺して矢弾降る戦野に戦ひ、また十歳にも達しなかった幼ない学童たちが、不運なる最期を遂げたことを偲ぶと、涙滂沱としてつくすべき言葉もない。

嗚呼！　わが学徒たちは、出で征きていまも還らざるか。

【『嗚呼沖縄戦の學徒隊』　（金城和彦著　原書房）所収】

学友たち戦友たち

三組　安里祥徳

昭和二十年三月二十日、米軍はついに具志頭村に艦砲射撃を開始、その砲音が首里にも轟くと学校の組織的活動は不可能に思われ、私は郷里の北中城村に避難した。三月二十九日、花城康明君が具志川から単身私の避難場所を探し当てて来た。一中の二年生は無線通信隊に配属されたとのことであり、吾々も入隊すべきではないかと意見を述べた。私は即座に賛成した。何のためらいもなく私の家族も賛成し、二人を励ましてくれた。

翌朝、二人は無線通信隊本部の所在地を探し廻り、やっとその隊の防空壕を見つけた。場所は繁多川の東の丘陵地のすそにあって首里の金城町に向かい合っていた。太い丸太木で枠組みされた壕は奥に深く延び、さらに横にも長く延びているようで、数百人の将兵が寝起きできる丈の面積があるように思われた。簡単な入隊手続きをおえた二人には日本陸軍の軍服一式と二等兵の階級章が与えられ、二人は二等兵になれたことをこの上もなく誇りに思った。花城君は四中隊に、私は五中隊に配属された。五中隊を訪れると、二年二組と三組の学友が総勢二十人程いた。みんな十四、五才の少年で、着ている軍服はだぶつき滑けいに見えたが、表情は明るく、国の為に頑張るんだという意気に燃えていた。

私の所属班は外部派遣の白沢班とのことで一日間を置いてその班に編入された。同班は首里城南西の下側にある俗称「ジングンジユウスメーの墓」の隣の自然洞くつを通信業務の拠点地として中央に通信機を据え、奥の岩盤に板を敷いて寝床を構えていた。既に大城秀一、照屋寛明、渡久山朝雄、伊波善一の諸君が入班し、勤務を開始していた。当班は球部隊司令部直轄の下に伊江島守備隊と交信をし、一日に二回司令部に伝令を走らせ、受信書を提出すると共に送信書を受領することが主な業務であった。通信機はやや原始的なしろ物で、受信は電池により、発信はマグネットの手廻し発電によって行なった。勤務は二十四時間の二交替制。食糧不足のためか非番の際は昼食を支給されなかった。吾々学徒二等兵の主な仕務は発信時の発電機の手廻し、司令部への伝令、飯揚げ、食器洗い、上官の寝床の用意等であった。

司令部への伝令は白昼に強行されたが、次から次へと飛んで来る敵の機銃掃射を受けながら、三、四十米走っては樹や岩陰に身を隠し石垣に身を寄せて横歩きし、また跳び出して走ったりしてハンタン山の司令部に辿り着くのであつた。伝令で走る区間が首里の高台にあるため、眼下に広がる東支那海では海面を覆わんばかりの無数の敵艦が砲火を噴いているのが見えるのであった。空からの幾千機による爆撃と千余の艦船からの砲撃で島中に砲音が轟き、四方八方に硝煙が立ち込めている光景を見ると、戦局をくつがえすのはもはや無理ではないかと、内心疑いが湧くのであったが、戦勝を信ずるのが義務のように思われた。二十四時間の当番の際、深夜以後の主な作業は発信時に発電機を廻すことであったが、体は疲労と睡魔にとりつかれてのめろうとするのを互いに叱咤し合い、歯を喰いしばって朝の交替時まで耐えたのであつた。

敵の攻撃方法には一種の型があった。日暮れ時、敵の砲撃は中断され、島全体が静まり返った。その折、姿こそ見えないが那覇沖の上空にかすかな爆音を立てて一機か二機の飛行機が近づいた。「わあ、特攻機だ！」と方々の壕から将兵や住民が跳び出し、那覇上空

に向かって「万才！万才！」と声を張り上げたのである、たちまち、敵艦群から何万発かの曳光弾、機関砲や高射砲が赤い尾を曳いて射ち上げられ、激しい炸裂音をたてながら空を赤く染めた。特攻機がどうなったのか吾々には見当もつかぬまま対空砲撃が終わり、そして洋上に何の火柱も見られぬとき、吾々はただぼう然とするのであった。

伊江島の守備隊が敵に陥落されると吾が班との交信はとだえ、間もなく吾が班は中隊本部へ引き揚げた。中隊本部の壕内には上下二段に張られた床に寝ている兵士で埋まっていた。壕内の空気は人々の体温と、何十日も入浴しない不潔な体から出た汗で暑く蒸せり壕内を点す幾つかのカンテラのすすで汚れていた。飯揚げ、水汲み、歩哨以外の非番時には、昼夜のけじめもさだかでないような暗い壕でみんなが息苦しさとけだるさで始終体を横たえるのであった。飯揚げには砲撃の危険があったが新鮮な空気が吸える喜びもあった。しかし、ある夜、飯揚げ時に四中隊の学友諸君と別れた後、彼等の幾人かが砲撃でたおれたと聞いたとき、吾々五中隊の学徒も深い悲しみに包まれた。（その犠牲者の中には、特に、私が入隊に誘った安里憲治君がいたので大へん申し訳ないことになってしまった。）吾が班が中隊本部に還ってからも、他の部隊の要請により、新たに通信分遣隊が組織され、古参兵に混じって幾人かの学友達も中隊本部を去って行った。

五月二十七日午後、敵の前線が戦車を先頭に首里に上りつつあるという情報を受けた吾が中隊では夜間繁多川を脱出、与座岳で一応集結してから摩文仁に撤退するという命令が下された。撤退前に乾パンや米が配られ、また吾々学徒兵には戦死者の銃剣が配られた。負傷兵を担ぐ組も編成され、古参兵二人に渡久山君と私の四人が一組となって負傷兵の一人を担ぐように指示された。夜の八時か九時頃、吾々は負傷兵を担架に担いで壕を出た。外は大豪雨であった。吾が中隊は識名の東側を南に降りて南風原に入り、東風平村に向かった。何処から寄せて来たのか、いつの間にか雨の中を南に向かってさまよう大きな群集ができ上っていた。暗闇で姿はよく見えないが、大勢の人々は何かを叫び合っていた。行軍の連繋を確認し合っている軍隊の声。親子が方言で叫び合っている住民の声。途方に暮れたさまざまな悲鳴声。喚き叫ぶ群集は暗い豪雨の中を粘る泥に足をとられながら南に流れた。泥の粘りは全くひどく、歩いているうちに私の履いていた片方の靴の底がとれた。吾々担架組の四人は片方の肩に銃と食糧を担い、別の肩に負傷兵の担架を担いだが、その重みはどんどん増して遂に耐えられなくなった。負傷兵に被せた毛布が雨を吸い込んだ事に気付くと毛布を捨てて進んだ。時折、近くに砲弾が炸裂した。初めは申し合わせたように腰をかがめたが、疲れると砲撃を受ける度に立ち停った。そのうち、私の足が鈍ってきた。負傷兵を放り投げて横に転がりたくなった。古参兵にはどんなに叩かれても構わない、もう限界だと思った。私が参り掛けている事に渡久山君は気付いたのであろう。「安里！頑張れ！頑張れ！もう直ぐだよ。」何度も何度も渡久山君に励まされると倒れる訳にもいかず、私は歯を喰いしばって頑張り抜いた。

やがて夜が白み、黒々とした人の影が見えるようになると凄惨な光景が現れた。兵士や住民の死体が散乱し、多くの負傷者がうごめいていたのである。所属の隊からも家族からもはぐれたと思われる孤独な負傷者が泥の中で幾百人となくもがいていた。泥だらけの顔をおこし、野戦病院を求めて四つん這いに進む負傷者もいた。「私は生きています。踏まんで呉れ。」と仰向きのまま頼む負傷者もいた。しかし、吾々にはどうしようもなく、た

だ自分達の負傷兵を担ぐのが精一杯であった。

吾々は中隊からはぐれ、二日遅れて中隊本部に合流した。中隊は既に摩文仁海岸斜面の共同井戸近くの天然壕に移動して陣を張っていた。「その壕には地方住民が避難していたんだが、軍命令で追い出したんだよ。老人や子供達が鍋かまを持って去る姿を見るのは本当に辛かった。」と一学友が話して呉れた。何ともやり切れない悲憤を感じ、改めて自分の家族や親戚を思い起したが、隊には何も逆らうことはできなかった。

五中隊は繁多川の壕の奥に通信機を埋めたので本来の通信活動ができなくなった。それ以後、食糧の調達と水汲みが吾々学徒兵の主な任務になった。摩文仁に着いた頃は爆撃がひどくなかったため部落周辺の畑でゆっくりと農作物を獲った。芋や人参などが大きく実っていたので中隊全員が腹を満たすことができた。しかし、何千人何万人かの兵隊や住民に作物が荒し獲られたため十日程経つと食糧は砂糖きび丈になった。吾々学徒兵は毎日砲撃の鳴り止む夕暮れ時、畑に突進、砂糖きびを担いできて壕に運び入れた。飢をしのいだものの空腹は耐え難かった。

戦局は一層緊迫を増した。吾が中隊でも敵陣への斬り込み班が二度も編成されて壕を去って行った。遂に、六月二十日の晩、学徒全員が呼び集められて一下士官から重大な発表を受けた。「敵は摩文仁の部落まで攻め込んできた。これ以上壕を維持するのは不可能なので、これで隊を解散する。生徒諸君はご苦労であった。北部では宇土部隊が健在という情報もある。諸君は地元なので地理にも詳しい筈だ。出来たら敵の前線を突破して宇土部隊に合流して貰いたい。また、日本の潜水艦が吾々を救いに来るという情報もある。どのように行動するかはお前達に任す」。その発表を聞いた私はたとえようのない恐怖感に襲われた。今まで軍隊という組織に加わり、これを頼りに気強く行動したが、敵を前にして組織が解かれるとはじめて自分がどんなに無力で頼りにならないものであるかを感じた。吾々学徒兵は非常用に取っておかれた米を靴下一杯ずつ貰い受けて、連れだって海岸に向かって降りだした。敵が連続的に打ち上げる照明弾の下をくぐりながら波打ち際近くまで来たが、そこから何処に進んでよいのやら一同は迷つた。意見は百出し、意見の合う者同士が行動を共にすることにした。私は名嘉座元司君、久場盛政君の二人と一緒になった。

三人は何処に進んでよいのやら途方に暮れ昼夜とも岩陰に身を隠した。波打ち際まで近寄る敵の掃海艦から拡声機を使ったはっきりした日本語で「軍人よ、避難民よ、戦いは終った。白い旗か白いシャツをかかげて港川に進め。」と何度も繰り返えして呼びかけ投降を勧めていた。これに応じて人々が港川に移動したのか周りの人の気配が薄らいだ。三日目の夕方、一下士官が吾々三人の間に入り、吾々を説得した。「なあ、お前達、手を挙げて捕虜になれ。敵の宣伝ビラには捕虜を虐待しないと書いてあるが、おれは正しいと信じているよ。捕虜の取扱いについてはジュネーブ協定という国際協定もあるのだ。お前達はここで頑張っても飢え死するだけだろう。戦争はもう終ったのだ。これからの日本はお前達青少年が立ち上って建て直さんといかん。やるべき仕事が一杯あるんだよ。…おれ達のとこか。おれ達は死んで当り前。今晩斬り込みに行くのだ。だけど、お前達は決して死ぬんじゃないぞ。いいか、明日なあ、手を挙げて出て行け」。死ぬのが国の為になると信じていたのにこれは全く意外な説得であった。彼の言葉に熱意と愛情が感じられ、信念がこもっているように思われた。

翌日、三人は岩陰から出て、両手を高く挙げ、陽の照る処を歩いた。摩文仁の丘上から

吾々の姿を認めた敵は拡声機の日本語で吾々を摩文仁の共同井戸の方へ誘導した。吾々は足をひきずり、いつ銃弾で撃たれるかも知れない恐怖におののきながら、白昼始めて周囲を見廻した。右にも左にも黒く膨れ上った幾千もの死体が散らばっていた。銃を肩にあて岩にもたれている死体、海面に浮んでいる死体、住民の親子が重なり合っている死体、肉がすつかり腐乱している死体、さまざまな死体を縫い歩きながら、吾々は摩文仁の共同井戸の側を上って、米軍に近づき、そして捕らわれた。二十人余の将兵も既に捕らえられ敵のトラックに乗せられていたが、その中には陸軍少佐という高位の将校も一人混じっていた。

捕虜収容所で吾々三人が最初に出会った五中隊の学友は二組の高嶺朝勇君であった。彼は三組の渡久山朝勇君と一緒であったが、渡久山君は自決してしまったと、その経過を次のように説明して呉れた。

渡久山君と行動を共にしていると一人の一等兵が仲間入りした。彼は吾々二人に何度も「軍人の本分を説き、絶対に捕虜になるなと注意し、米軍にとらわれるくらいなら一緒に自決しようと吾々の覚悟を促した。」彼は吾々にも手りゅう弾を配って、その使い方を教えた。翌朝、物音で目をさまし、気がつくと米軍が吾々をにらんで銃を向けていた。僕は自決しようと手りゅう弾の信管を抜きかけたが、隣の渡久山君が真先に手榴弾を爆破させてしまった。僕はその爆風を受けてひっくり返えった。暫く意識を失い、気がつくと、僕は米兵に捕まっていた。隣の渡久山君は既に息絶えていた。憎ったらしいことにその兵隊は真先に手を挙げて捕虜になりやがっていた。全くいまいましい。そいつは気まづくなったのか、捕らわれた後、僕の前から姿を消してしまった。」

こう語る高嶺君の胸には手榴弾の破片で傷ついていた。

【『友，一中一条会』　（沖縄県立一中一条会）所収】

金城素子の手記

昭和二十年三月二十日、私たち三年生は、看護要員として徳田安信先生、新垣仁正先生、石垣実俊先生に引率され、南風原陸軍病院一日橋分室に配置された。最初三十名ほど一緒だったが、一週間後にはその半数の者が新垣先生、石垣先生に引率されて識名分室の方へ移っていった。

識名分室は、一日橋北方の丘陵斜面に、一日橋分室は、一日橋東方の小高い丘にあった。わたしたちの一日橋分室は、玉置軍医、衛生兵二人、炊事の兵隊一人、正看二人、そして徳田先生と残った生徒十五名ほどの構成であった。

壕はL字型になっていた。出入口付近から通路の両わきに二段になった寝台が設けられ、通路はやっと歩ける幅しか残ってなく、また壕の高さも、大人が立ってやっと歩けるぐらいのものでしかなかった。壕の一方の長さは十メートルぐらいで、その中央に先生と軍医の部屋、私たちの部屋は、部屋と言えるようなものでなく、三畳位の広さに板が敷かれているだけであった。昼夜交代で、半数の者が仕事について、残り半数の者がそこにいるわけであるが、それでもなんとかお互いに体をちぢめ休息をとることができた。